

日本国内閣府気付 外務大臣 岸田文雄様

広島市長 松井一實様

広島市御担当課 健康福祉局原爆被害対策部調査課 御中

(写し) 日本国内閣府気付・内閣総理大臣 安倍晋三様

平成 28 年伊勢志摩サミット開催に伴うオバマ米国大統領 「被爆地訪問」に関する意見書 (公開文書)

「広報番号：HA2018-05/1」

平成28年5月吉日

前略

昨年のNPT再検討会議での採択ご努力に深く敬意と感謝を申し上げます。

この会議が、『韓国他12ヶ国が同調して「日本は第二次世界大戦の加害者ではなく被害者であるように描こうとしており、被爆地訪問は歴史を歪曲するものだ。』とした中国の専横で決裂したことは、一部核兵器国も含んだ諸国の思考を浮き彫りにした歴史的
事実として長く記憶に留められるでしょう。そして被爆者とそれに連なる者にはこれら
諸国への認識を新たにしました。

今年、そのNPT会議決裂を補うように「伊勢・志摩サミット」に出席した各国代表
が来広し、死没者追悼と原爆の各施設見学をされたことは、外務大臣並びに広島市長の
ご努力の賜物であると、高く評価し、感謝申し上げます。

さて、各国代表の来広に続いてオバマ・アメリカ合衆国大統領の来広が決まりました。
報道によれば、大統領発言等に関する擦り合わせが外交当局間で行われている模様だと
思われます。

この事案に対し、私達は「被爆者団体」の一つとして、見解を申し上げるべく本書を
提出いたします。御一読給われますようお願い申し上げます。草々

平和と安全を求める被爆者たちの会 代 表
同 副代表

山本 匡 (被爆二世)
池中美平 (被爆二世) (文責)

HP <http://www.realpas.com/>

E-mail info@realpas.com

―見解書―

1. オバマ大統領（以下、失礼を承知で「オバマ氏」と略称）来広への思い

当会は、合衆国大統領として初めての来広を歓迎します。オバマ氏におかれては、核兵器のもたらす現実の惨禍を眼に留め、そして死没者に対する深い慰霊をして頂きたい。また原爆から生き延びても、その後遺症で長い苦しみに耐えてきた人々が今も存在することにも、想いを馳せて頂きたい。しかし、当会はオバマ氏には『謝罪』を求めません。何故なら原爆投下に関与した当事者ではなく、また合衆国政府の統一意志を代表しての訪問でもないからです。その昔、長崎に寄港した米潜水艦の乗組員が平和記念像に献花したとき、一部の被爆者がそれを妨害し、花輪を足蹴にして破壊する行為がありました。これは「暴挙」の類であってこれに類する行為は慎むべきです。既に対等の関係にある両国と国民にとって、非当事者への「謝罪要求」や「受容や拒否」は問題の焦点ではありません。ですから、一部報道での、オバマ氏来広の“成果”のために日本側から「謝罪を求めない」と申し出たことは無かったものと信じたい。

しかしながら、原爆投下も都市への空襲も艦砲射撃も非戦闘員も目標にした無差別攻撃だった事実は絶対に忘れません。これらの行為は、当時の国際法、例えば、「陸戦条約」「海軍砲撃条約」「空戦規則案」等でも明確に禁止された『戦争犯罪』でした。しかも戦犯裁判は日本人だけが対象でした。オバマ氏だけではなく、合衆国国民も日本国民も、この歴史事実を直視すべきであって、「原爆投下が戦争終結を早めた」とか「米将兵の命を救った」とかの正当化は絶対に受け入れられないのです。もし、この正当化理由を承認するならば、現在混迷の極に達している IS 支配地などへの「根こそぎの殺戮」核攻撃も正当化できることに繋がっていくでしょう。

2. オバマ氏の「核なき世界」と日本の「反核平和」は全く違う

オバマ氏は一期目の大統領就任後の 2009 年 4 月 5 日のチェコ・プラハで「かつて、核兵器を使用した唯一の核保有国として、合衆国は行動すべき道義的責任を負う」と演説しました。この言葉に小躍りした一部の日本人や行政当局者がいましたが、それも今は昔。「核無き世界は米国単独では達成できないし、自分の存命中にも実現しないだろう」と言ったことが現実でした。一方、オバマ氏は「核兵器が存在する限り米国は安全保障の保持のために効果的な兵器廠であり続け、同盟国の防衛を保証する」と言いながら、最近「米国は世界の警察官ではない」と発言したために、中東の安定は遠ざかり、日本への脅威は高まりました。韓国とイランには 20%までのウラン濃縮を許容し、イランには交渉の末に 15 年の期限付きで同じことを認めました。15 年が過ぎれば、イランは核兵器級のウラン製造も可能になったのです。オバマ氏の言う「核なき世界」の姿が明確になったことで、危険を感じたサウジとエジプトは核武装の意志を明確にしました。ことほど左様に、核兵器への対応は困難で「核なき世界」への道筋はその糸口さえ見えていません。昨年のストックホルム平和研の発表では、中国と北朝鮮だけが保有核兵器数を増加させています。「被爆地訪問は加害者が被害者を装うことだ」として自国の核を正当化する国が日本の隣にいるのです。日本が三度目の核攻撃はおろか高度な通常兵器の攻撃をどう防ぐかは、「核無き世界」の夢を追う以上に、緊急の課題です。現在、リアルタイムで見るシリア空爆の映像は、「核兵器」とは無縁です。歴史的事実からも「核無き世界」が「平和な世界」ではありませんでした。昔のオバマ氏の演説は日本の「反核平和」とは全く別物でした。日本の根本的意識転換が必要です。

3. オバマ氏来広の政治的意義

オバマ氏には、危機対応での逡巡が事態の悪化を招くという理念先行型政治家の特徴がありました。それが日本にとって好ましくない周辺事態を招いた原因の一つでもあるでしょう。また、オバマ氏は、日本の首相が日本の戦死者を追悼する行為に「失望」した最初の合衆国大統領でもありました。

さりながら、東日本大震災での日本支援での括目すべき米軍の働きと、オバマ氏の決断はいかなる感謝の言葉をもって表現できないほどの感銘を私達に与えました。両者の違いは、おそらく相手が国か自然かにあるのでしょう。

オバマ氏の8年の執政のスタートがプラハ演説ならば、広島訪問はその「行動すべき道義的責任」の最後を締めくくるのに相応しい場所でしょう。当会は、その意味での来広を「歓迎」し、静かに「受け入れ」ます。

但し、日本が間違っただけではありません。オバマ氏が来広して演説しても、現職大統領の海外での個人的見解の表明が次期大統領の政策を規定することはなく、世界は寸毫も「核無き世界」には近づきません。そこには「中韓との駆け引き手段」か「象徴的」意義以上の政治的意味はないでしょう。日本は既に次期合衆国大統領の行動予測とともに、日本の平和と安全をどのようにして当面を凌ぐかを政治リアリズムに基づいて真剣に考慮する時に来ています。日本には薄っぺらに過ぎる「安全保障法制」を「反核・平和」の名で敵視する愚かさを止めましょう。理念だけでは何も生まないことを、逆に状況を悪化させる可能性のあることを、オバマ氏は示しているとも言えるのです。

以上

追伸

最新の報道で、オバマ氏の来広に日本軍の捕虜だった元軍人が同行することになったとあります。これが正しいなら、西太平洋各地のBC級裁判で曖昧な根拠が多かった「捕虜虐待」と原爆投下を相殺する意図を感じます。本信本文でも記載した通り、連合軍捕虜虐待で日本人は裁判され処罰・処刑されたにも関わらず、日本人に対して広範に遂行された戦争犯罪行為である非戦闘員虐殺では裁判すら行われていません。「相殺」意図があるとすれば「おこがましい」としか評価できません。オバマ氏は米国の在郷軍人会の「原爆正当化」勢力に屈したようです。オバマ氏の「核無き世界」からは、「核兵器を使用した唯一の国として行動する道義的責任」は消滅したのでしょうか？ これら事象から、当会としては「オバマ氏来広は受容する。元捕虜の同行は歓迎しないし謝絶したい」と変更する希望を表明します。